順天堂グローバル教養論集　第五巻（2020）63–68 頁

書　評

高鵬程著『近代紅十字会与紅卍字会比較研究』
（中国合肥：合肥工業大学出版社、2015 年）

大江 平和 [1)*]

1. はじめに

中華民国期（1911 年 -1949 年）は、戦争と災害が続いた時代であった。塗炭の苦しみに喘ぐ中国の民衆に対し、当時の政府はあまりに無力であった。そのため、1920 年前後に多くの慈善事業や社会救助を掲げる諸団体が登場した。その一つに世界紅卍字会（The World Red Swastika Society）がある（以下「紅卍字会」と記す）。紅卍字会とは、1921 年山東省済南に成立した道院とよばれる宗教団体を母体とする社会救助事業団体である。その後、紅卍字会は急速に全国的な広がりをみせ、中国各地で教育・福祉・医療施設などを運営し、戦時や災害時には傷病者の救護活動を展開した。

もう一つ、紅十字会（Red Cross Society）がある。紅十字会とは、中国の赤十字社（以下「紅十字会」と記す）を指す。周知の通り、日本の赤十字社誕生の契機となったのは西南戦争（1877 年 2 月）であり、その際、日本赤十字社の前身である博愛社が設立された。一方、中国の紅十字会は 1904 年上海で「万国紅十字上海支会」が成立し、日露戦争の戦場に救護班を派遣したのが嚆矢である。1912 年には赤十字国際委員会より 23 番目の加盟国として正式に承認された。

この紅卍字会と紅十字会について、著者の高鵬程氏は、数ある団体の中で「20 世紀以来、中国社会救助史における 2 本の重要な支柱」と位置づける。著者は現在、南通大学副教授で、民国期社会救助組織の研究を専門とする。2011 年、蘇州大学へ提出した博士学位論文をもとに刊行された『紅卍字会及其社会救助事業研究（1922-1949）』（中国合肥 : 合肥工業大学出版社、2011 年）では、伝統的な社会救助事業や清末の義賑（貧民への救済）という視角から紅卍字会の活動を系統的に解明した。その成果を踏まえて執筆された本書は、両会の比較研究を試みた画期的な一書である。

評者はもともと現代中国の社会福祉につながる民国期の慈善事業に関心をもち、当時、著名な慈善教育機関である北京香山慈幼院について研究を重ねてきた。当院は 1920 年、熊希齢（1870-1937）という清末民初の紳商（教養・品位を備えた名士）によって創設された。熊希齢は、上記の紅卍字会の結成にも関わり、同会の中華総会会長を務めたことでも知られる。評者が紅卍字会に興味をもち、本書を知るに至った所以である。

2. 全体の構成と要約

本書は序・結論および 6 論文からなり、以下のような構成となっている。

[1)] お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所特別研究員
順天堂大学国際教養学部非常勤講師
（Email: h.oe.ry@juntendo.ac.jp）
* 責任著者：大江 平和
〔2019 年 8 月 29 日原稿受付〕〔2020 年 2 月 5 日掲載決定〕

序論
第 1 章　紅十字会と紅卍字会における起源
第 2 章　紅十字会と紅卍字会における組織の比較
第 3 章　紅十字会と紅卍字会における会員の比較
第 4 章　紅十字会と紅卍字会における運営体制の比較
第 5 章　紅十字会と紅卍字会における社会救助事業の比較
第 6 章　社会救助社団と政治勢力
結論
図表索引／参考文献／あとがき

評者が着目するポイント及び論点に絞ると、大要以下のような内容が描かれている。

紅十字会はキリスト教に淵源をもつ。その組織は総会と分会に分かれ、総会が分会を統制する縦の力が強かった。一方、紅卍字会は、1920 年代に中国で生まれた民間宗教である道院信仰の慈善団体である。紅十字会に比べると、分会同士の横の繋がりが緊密で、ネットワーク型組織を形成していた。財政運営面では、紅十字会の方が政府から潤沢な資金を得ることができた。

上記は以下の 4 つの相違点を生んだ。①自主性。紅十字会の自主性は衰退し続けたが、紅卍字会のそれは終始変わらなかった。②会員拡充の目的。紅十字会の当初の目的は資金集めであった。その後、後述する中華民国紅十字会管理条例施行細則によって政府の意向に沿うようになり、会員拡充は「新国民」育成の手段と化した。③発展過程。当初､紅十字会の発展はサービスのやりとりに拠るものであったが、後には行政手段に依存するようになった。一方、紅卍字会の発展は、主に道院信仰の布教を依り拠にしていた。④会員拡充。紅十字会は紳商を主とする社団から平民を主とする社団へと変化した。一方、紅卍字会は一貫して道院信仰を信奉する紳商からなる慈善団体として存在し続けた。このように紅十字会のシステムが政府色を濃厚に帯びていたのに対し、紅卍字会のそれには宗教的色彩が強く見られた。

また、紅十字会はとくに医療救助に重点を置き、1945 年の日中戦争終結後は、政府の手厚い保護を得て社会救助型から社会福祉サービス型へと転換した。これに対し、紅卍字会は自発的かつ直接的な救助活動が多く、日中戦争終結後は政府の保護が得られず、その事業は後景に退いていった。

最終的に紅十字会は「官」による運営となっていくが、紅卍字会は道院という信仰ゆえに政府からの弾圧を招いた。道院は南京国民政府による反迷信活動の取締り対象となったからである。これ以降、長年の活動が考慮されて紅卍字会の存続は許されたものの、無認可の道院を抱え込んだ「慈善団体」紅卍字会として活動することを余儀なくされた。

このように紅十字会は紳商からなる社団から平民を主とする社団へと変化を遂げていった。一方、紅卍字会は、道院信仰の面では政府から弾圧を受けたものの、社会救助事業の面では政府の支持を得ていた。それは本来政府が担うべき社会救助の役割を肩代わりしていたからである。そのため社会救助活動は道院信仰の隠れ蓑ともなった。

最後に著者は、両会の異同を比較した結論として、第 1 に、近代中国社会では、当初は、紳商階層及び彼らの信仰心が社会救助において重要な役割を果たしたこと。第 2 に、近代的な社会救助では様々な政治勢力、主に政府がその後の社会救助事業団体発展の鍵を握っていたこと。第 3 に、政府が両会に対する態度や対応の手法は西洋に倣ったものであったが、必ずしも「人道」という普遍的な精神に基づく価値観、信仰や結社の自由を深く理解したものではなく、むしろ民国政府の価値観を反映するものであったこと、以上の 3 点を挙げている。

3. 本書の意義・課題について

次に、本書の意義・課題について整理をしてみたい。

著者によれば本書の目的は、ともに社会救助機能を発揮した両会の比較・分析を通して、民国期の紳商という伝統的エリート層を含む社会の実態を解明することにある。著者の立ち位置である「社会救助史」とは、より広い学問分野で言えば「社会史」ではあるが、そこには「政治史」、「文化史」、「医療史」、「宗教史」も内包され、著者はそれらの方法・視点・成果も積極的に取り入れている。

まず本書の意義について評者は次の 2 点を挙げたい。第 1 に、従来の研究では、社会救助団体を検討するにあたり、とかく一つの団体のみに焦点があてられ、創設者の功績をはじめとする組織の詳細が強調される傾向が強かった。それに対し、本書ではとくに財政運営の観点から二つの団体を比較することで従来の研究を相対化し、財政運営の観点から政府・社会における社会救助団体を位置づけようと試みた。この点が研究上の成果として高く評価できる。端的にいえば、両会ともに社会救助事業団体として財源は決定的に重要な意味をもった。それはその団体の存続と活動を支える根本的基盤要因であったからにほかならない。ではその財源はどこから来たのか。

紅十字会について著者は、「自己調達」、「社会からの寄付」、「政府からの補助金」の 3 類に分けて考察する。

このうち「自己調達」については、主に会費収入に依拠するため会員拡充に迫られたが、地方分会はその会費収入の実に 5 割を総会に上納していた。ここに総会が分会を統制する縦の力が強かった紅十字会の特徴を見て取ることができる。

また「社会からの寄付」については、紅十字会が国際赤十字社の系譜という国際的地位が大きな強みとなった。外国の赤十字社が中国で人道救助を展開する場合、手を組む相手は紅十字会だったからである。そのため海外の華僑などから多額の寄付金を吸収することができた。

さらに「政府からの補助金」については、1933 年「中華民国紅十字会管理条例施行細則」が公布され、法的に紅十字会が政府の管理下に置かれると同時に優遇政策がとられた。1935 年から日中戦争開戦前までだけを見ても国民政府は紅十字会に対し毎月 3 千元という多額の補助金を投入した。補助金は総会の寄付金収入の 5 割を占めたという。それは、近代上海の慈善事業を公共性との関係から捉えた小浜正子氏が指摘するように「国家の社会への浸透が進行した」（小浜正子『近代上海の公共性と国家』、研文出版、2000 年）過程でもあった。ただし敢えて附言すれば、「民」が成熟した近代上海の社会団体とは異なり、紅十字会は「官」に強力に取り込まれていったがゆえに、「地方政治等の改革運動」や「ナショナリズムの発展」を牽引する原動力にはならなかった。

一方で、紅卍字会についても著者は「自己調達」、「社会からの寄付」、「政府からの補助金」の 3 類に分けて跡づける。

「自己調達」については、会費納入が義務づけられたが、主たる収入はむしろ会員による不定期の寄付であった。このほか仏像の販売や戒名の授与などによる収入や、分会で所有する動産･不動産に伴う収入もあった。興味深いのは、宝くじの発行を通じて資金を得ていたことである。

また「社会からの寄付」については、雑誌・新聞などを通じて、被災状況の報道と支援の呼びかけを抱き合わせで行った。

財政運営面における両会の決定的な違いは「政府からの補助金」である。紅卍字会の方は、災害が発生する都度､臨時に交付されるもので、紅十字会のように法的に保障される形で継続・安定的に交付されるものではなかった。このため、紅卍字会の社会救助活動の展開は、財源の不安定さによる影響を免れなかった。

本書の意義は、第 2 に、国家と両社会救助団

体との関係、いわゆる「官」と「民」との相克をどのように克服しようとしたのかについて解明した点である。1949 年中華人民共和国成立後、中国政府は旧来の各種慈善団体を接収し、民間の慈善団体はいったん社会から姿を消した。その状況が一変するのは、1978 年改革開放期を迎えてからのことである。2016 年には慈善公益事業に関する法整備も行われ、近年、中国では慈善事業に大きな注目が集まっている。その関心の所在は、官の主導性と民間の活力とのバランスを如何に保つかにある。

中国ではいつの時代にあっても存在していたこの課題について、著者が中華民国期の紅十字会と紅卍字会の比較研究を通して深く切り込んだ功績は大きい。著者は「紅十字会については、『民』か『官』かという点、紅卍字会については『合法』か『違法』かという点が、国家とのせめぎあいのなかで焦点となった」と鋭い示唆を投げかけた。

評者の研究に引き付けて言えば、熊希齢が設立した北京香山慈幼院の財政運営についてみると、「官」か「民」か、といった二項対立的な図式では必ずしも特徴づけられないものであった。当院は熊希齢が私人として始めた事業ではあるが、当初より、政府の補助金に大きく依存していたからである。しかもその補助金は政府予算として正式に支出されたものではなく、諸部局からバラバラに給付されるもので、その背景には熊希齢の個人的人脈が存在していた。私人性を内包する給付ゆえに、時局によって左右される不安定さも伴っていたのである。

次に、あえて課題についてもいくつか論じたい。

第 1 に、地方の紅卍字会の社会救助活動として、上海近郊の南通紅卍字会のみを検討している点である。日本軍統治下に置かれた 1938 年の紅卍字会の巧みな対応と救助活動の実態を検討している箇所は興味深いものの、全国に展開した紅卍字会を相対化するためにも南通以外の事例研究が必要ではなかっただろうか。

第 2 に、紅卍字会において中華総会会長の果たした役割である。熊希齢は 1925 年から死去する 1937 年まで中華総会会長として紅卍字会の社会救助事業の陣頭指揮をとっていた。こうした活動の展開には、熊希齢の築いてきた人脈が資金獲得のルートとしても有効に機能したであろう。では、熊希齢亡き後、王人文（1863-1941）が会長に就いてから何か変化はあったのだろうか。このように両会の指導層の人事について、如何なる経歴をもつ人物が如何なる役割を担い、如何なる影響を及ぼしたのか、について論及が欲しかったところである。

第 3 に、両会の慈善理念や動機づけ、さらに宗教の果たした役割である。この点に着目すれば、両会についてより多面的・立体的に捉えることができたと思われる。たとえば中国近代の災害と民衆宗教との関わりに関心を抱く武内房司氏は、紅卍字会について宗教ユニヴァーサリズムを強く志向する「民衆宗教団体」の一つに位置付ける。そして「世界紅卍字会の指導者の主張が民衆の共感を呼び起こし、『人々の生活経験にある転換を呼びかける超越性』を発揮した」とし、「そうした『超越性』なしには」「危険を冒して銃火飛び交う戦場に赴き、かつ死穢の恐怖を克服しながら遺体を収容するなどの一連の事業を担うことも不可能であった」（武内房司編『戦争・災害と近代東アジアの民衆宗教』、有志舎、2014 年）と述べる。このように公益活動を支えた内的モメントとして、両会の慈善理念やその動機づけ、より一歩立ち入って宗教の果たした役割を掘り下げていく必要があるように思われる。

最後に、財政運営の観点から、両会とかつて評者が検討した北京香山慈幼院との共通・相違点として以下のことを指摘できる。共通点はともに情報発信のための徴信録の発行等を通して収支報告書を公開し、社会からの信用を獲得した点である。一方、相違点は広範な地域からの安定した資金調達ルートをもつ紅十字会とは異なり、紅卍字会や北京香山慈幼院はそのルート

が限定的にならざるを得なかった。こうした共通・相違点がなぜ生じたのかという問題については、両会の中華民国史全体の中での位置づけが問題を解く重要な鍵になると思われる。しかし本書では両会の中華民国史全体の中での位置づけについて十分な議論が尽くされたとは言い難い。というのも両会の財政運営面を含めさらなる実態の解明が待たれるからである。それが評者も含めて今後の大きな課題だとも言える。

4. おわりに

以上、本書の成果と課題について論じた。課題については、評者と著者との間に関心のずれがあり、「ないものねだり」であるかもしれない。著者と読者の方々のご海容を願いたい。本書で論証された紅十字会と紅卍字会の差異は、豊富な一次史料と丁寧な史料解釈に裏付けられたものである。中国語で書かれたものではあるが、近代から現代に至る中国の社会福祉に関心をもつ多くの方々に手にとっていただきたい一書である。

Book Review

"The Comparative Study of The Modern Chinese Red Cross Society and The World Red Swastika Society"

Heiwa OOE[1)] *

Abstract

The author Gao Pengcheng undertakes a comparative study of the Chinese Red Cross Society and the World Red Swastika Society and evaluates both as "very important institutions in the history of humanitarian activities in Chinese history since the 20th century."

This book aims to expand on previous research by comparing the two organizations from a financial perspective. Also, it clarifies the relationship between the nation and the two organizations and how they overcame the conflict against the "government." However, there are three problems with the book. First, to make the World Red Swastika Society relativize, additional case studies are needed. Second, the author should mention the role and influence of the chairman of the World Red Swastika Society. Third, it is necessary to focus not only on the activities but also on the organizations' philosophy and motivation and the role of religion. Finally, the reviewer suggests that the author should analyze these organizations in relation to the history of the Republic of China so as to understand the differences of these organizations.

Key words

The Republic of China, the Chinese Red Cross Society, the World Red Swastika Society, social rescue, charitable work

[1)] Migakazuba researcher, Global Leadership Institute, Ochanomizu University
Part-time lecturer, Faculty of International Liberal Arts, Juntendo University
(Email: h.oe.ry@juntendo.ac.jp)
* Corresponding author: Heiwa OOE
〔Received on August 29, 2019〕〔Accepted on February 5, 2020〕